［総説］

障害児者にかかわる対人援助職のストレスに起因する成長に関する文献的検討

Literature review: Posttraumatic growth of human service professionals working for people with disabilities

○松浦　淳[1]　　菅原　弘[2・3]　　橋本　陽介[2・4]　　熊井　正之[2]

MATSUURA Jun[1], SUGAWARA Hiroshi[2・3], HASHIMOTO Yohsuke[2・4], KUMAI Masayuki[2]

青森中央短期大幼児保育学科[1]　東北大学大学院教育情報学研究部・教育部[2]
仙台市立川前小学校[3]　日本学術振興会特別研究員[4]

Department of Child Care , Aomori chuo junior college [1] .

Graduate school of Educational Informatics ／ Education Division ／ Research Division, Tohoku University[2].

Sendai Municipal Kawamae Elementary School[3].

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science [4]

KEY WORDS：対人援助職、ストレスに起因する成長、ポジティブ心理学

1．背景と目的

対人援助職とは、教育・医療・福祉領域を代表とする職業として人との係わりを行う職域であり、その職に就く個人の職業人としての側面を指す場合もある（小堀 ,2005. 奥川 ,2007）。

この対人援助職の職務上の能力は、経験や知識等の様々な要素に影響を受けるとともに、日々変化している（奥川 , 前掲）。この変化のうち、職務の目的に照らして肯定的な変化を指す表現として、成長、養成、育成、熟達化、発達などがある。本研究では、より広い現象を対象として検討を行うために、この障害児者にかかわる対人援助職の肯定的な変化について、成長と表記する。

教育、医療、福祉等の各領域における対人援助職の成長を分析する視点としては、まず、以下の３つの視点が挙げられる。第一に否定的な局面としてバーンアウトという現象、第二に客観的には問題が発生する可能性の高い状況を積極的に乗り越えていくレジリエンスという概念、第三に職務上の経験や状況を振り返る視点として感情労働という労働観である。これらの３つの視点は、対人援助職の専門性にかかわる要素を持っており、対人援助職の成長にかかわる重要な視点と考えられる。

これに加え、奥野（2011）や金沢・岩壁（2006）は、対人援助職の職務上のストレスが成長をもたらす現象があることを報告している。この現象については宅（2010）が詳細に述べているように、対人援助職に限らず一般的に起こる現象である。そして posttraumatic growth が元来の表現であり、

略称としてPTG、あるいは、心的外傷後の成長とも表記されている（宅,前掲）。本研究ではこの現象について、心的外傷よりも広い範囲のネガティブな経験を対象に含むために、奥野の報告（前掲）にならい、ストレスに起因する成長と表記する。

ストレスに起因する成長は障害児者にかかわる対人援助職にも起こりうるものであり、職務上の成長に対して重要な意味を持つと思われる。しかし、奥野の研究は看護師、宅の研究（前掲）は中学生と高校生の変容過程を扱ったものであり、現時点ではこのテーマを障害児者にかかわる対人援助職の現象として直接的に研究対象とする文献は見当たらない。一方で、先に挙げた職務上の成長過程を分析する３つの視点による先行研究の中には間接的にストレスに起因する成長を扱っているものがあり、今後の研究を進める際にはそれらの知見を手がかりとすることができる。

以上から、本研究では、障害児者にかかわる対人援助職のストレスに起因する成長の位置づけ、意義、今後検討すべき課題を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

先ほど述べた目的に向けて、本研究では障害児者にかかわる対人援助職のストレスに起因する成長について、職務上の成長を分析する既存の３つの視点から先行研究を概観するとともに、ストレスに起因する成長という視点から先行研究を整理し比較検討を行う。

第一に、国立情報学研究（NII）が開設、運営を行っている学術情報サービスを提供するポータルサイトである「NII学術ポータルサイト;GeNii」を利用し、2012年５月16日に下記のキーワード群について文献検索をおこなった。キーワード群①は成長に主たる影響を与える視点として用いられる言葉である。また、キーワード群②は、本研究の目的に即して、キーワード群①が影響を与える領域を絞り込むために設定した言葉である。なお、これらのキーワード群については英語を含む類似する表現を検索対象とした。

キーワード群①：バーンアウト、レジリエンス、感情労働

キーワード群②：障害、教育、医療、看護、福祉、障害・教育、障害・医療、障害・看護、障害・福祉

第二に、検索結果のうち、障害、およびストレスに起因する成長に関連する内容を扱っている文献を収集し、その内容について整理、比較した。

3. 結果

第一に、文献検索の結果をTable 1に示す。なお、この件数はキーワード群①の類似する言葉の検索結果も含む総件数であるため、重複する文献が含まれている。

まず、Table 1では無地で示した、障害をキーワードに含まない部分について述べる。バーンアウトについては各キーワードに関する文献が152件から451件得られ、その内の125件から422件が雑誌論文であった。そして最も多く文献が得られたキーワードは看護であった。レジリエンスについては各キーワードに関する文献が55件から279件得られ、その内の50件から230件が雑誌論文であった。そして最も多く文献が得られたキーワードは教育であった。感情労働については192件から1008件の文献が得られ、その内の32件から87件が雑誌論文であった。そして最も多くの文献が得られたキーワード

は教育であった。ただし雑誌論文に注目すると、看護が最も多くの論文件数が得られるキーワードであった。

次に、障害をキーワードに含む検索結果については表中に網掛けで示した。バーンアウトについては各キーワードに関する文献が12件から26件得られ、その内の８件から21件が雑誌論文であった。そして最も多く文献が得られたキーワードは福祉であった。レジリエンスについては各キーワードに関する文献が１件から９件得られ、その内の１件から５件が雑誌論文であった。そして最も多くの文献が得られたキーワードは医療であった。感情労働については６件から186件の文献が得られた。この内、福祉をキーワードとした場合のみ、１件の雑誌論文が得られた。そして書籍で最も多くの文献件数を得られたキーワードは教育であった。

Table 1　キーワード別文献件数一覧

※2012年５月16日現在

	バーンアウト	レジリエンス	感情労働
障害	89（63）	142（107）	241（２）
教育	366（324）	279（230）	1008（50）
医療	152（125）	101（74）	465（36）
看護	451（422）	85（82）	224（87）
福祉	178（154）	55（50）	192（32）
障害・教育	16（11）	6（３）	186（０）
障害・医療	22（11）	9（５）	58（０）
障害・看護	12（８）	1（１）	6（０）
障害・福祉	26（21）	4（３）	18（１）
（単独）	3826（2134）	11294（6254）	3150（2798）
※数値は論文件数＋書籍件数、括弧内はその内の論文件数			

第二に、Table １における網掛け部分に該当する文献の内、その内容としてストレスに起因する成長に関連するものを整理、比較した結果について述べる。

まず、バーンアウトについては11件の論文と４件の書籍が得られた。その研究目的として、バーンアウトの概念自体を検討したものから、後述する職種を限定してバーンアウトの実情を把握しようとするもの、さらにその対策を検討しようとするものまで、幅広い目的について研究がなされていた。その結論として、バーンアウトに至る過程は多様なものであり対人援助職という枠組みはバーンアウトという現象の描写には大きすぎるものなのではないか、という指摘が多くみられた。そして職種を絞った検討として、ソーシャルワーカーを対象とした清水・田辺・西尾（2002）や知的障害者施設職員を対象とした長谷部・中村（2005,2009）、障害のある児童の担任教師を対象とした高田（2009）、小学校、中学校の教員を対象とした宮下（2010,2011）、看護師を対象とした小堀（2008）などが行われていた。その内容としては、主にバーンアウトの生じる背景や防止方法を明らかにすることを目的としており、組織内の環境、個人内の要素を対象とした分析、検討が行われていた。

その結果、第一に、バーンアウトのリスク要因として、共感性や勤勉さなどの個人内要素がある

ことが指摘されていた（清水ら , 同 . 増田・外島・藤野 ,2003. 小堀 ,2005前掲 ,2008前掲）。そして第二に、同様のリスク要因として、職場の人間関係の重要性が指摘されていた（宮下 , 同 . 上野・山本 ,2011）。そして、これらはストレスを生みバーンアウトにつながるリスク要因であるとともに、成長につながるサポート資源でもある、と指摘されていた。第三に、職場環境に対するネガティブな認知が、業務内容への不安感や負担感に影響を与える可能性について示唆されていた（高田 , 前掲）。

次に、レジリエンスについては７件の論文と２件の書籍が得られた。全体的に、「レジリエンス」「レジリエンシー」「回復力」「弾力性」など、レジリエンスの表記、そして定義に幅がある状況であった。その一方で共通点としては「人間本来の可塑性のポジティブな発現」（加藤・八木 ,2009）に注目していることを指摘できた。そして、定義に幅があることに伴い、レジリエンスは要素、過程、結果でありうる包括的な概念となっており（加藤・八木 , 前掲）、ストレスに起因する成長を含む人間の可塑性に対するポジティブな概念となっていた。

このためレジリエンスに関する実践的な調査・報告の内容としては、第一に個人においてレジリエンスが発現する状況やレジリエンスの構成要素について事例をもとに文脈を分析する報告が見られ、レジリエンスの発現には、外的刺激の存在と、その刺激に適応する過程との双方に対する肯定的な認知の成立が重要である点が指摘されていた（SalvatoreR.Maddi,DeboraM.Khoshaba,2005. 山﨑康司訳 ,2006）。第二に、大学生及び専門学校生のレジリエンスの要素を分類する試みからは、ストレスのある状況下で感情的にならず、そのストレスを打破するような新たな目標を持つことができる、という資質的要因と、自分の気持ちや考えを把握することによりストレス状況の改善に向けた意志を持つことができる、という獲得要因とがあると指摘され、特に後者の発現には他者理解と自己理解の双方の深まりを経ることが必要ではないかと主張されている（平野 ,2010）。第三に、主として障害を持つ子どもを含む家族を対象として家族レジリエンスについて調査した報告によると、家族レジリエンスを重視した家族支援とは、家族の力が主体的に発揮できる過程へと導くことである（得津 ,2008）、とされている。また、障害を持つ子どもを育てる母親を対象とした報告によると、母親のレジリエンスを構成する要素として、外部とのかかわりの中で得られる要素と、個人の獲得的な要素とがあることが示され、生来的な資質よりも獲得的な要素の影響が強いことが示唆された（橋本・橋本・熊井 ,2011）。

最後に、感情労働については、５件の論文と１件の書籍が得られた。研究対象としては、働く上での身近な外的環境について取り上げる一方で、自分の個人内要素や、かかわる相手からの反応という要素については分析対象になっていないこと（須賀・庄司 ,2008）が指摘されている。また、当初感情労働は、客観的に把握されづらい疲労・消耗に注目できる視点、労働観として扱われてきたものの、近年では肯定的な見方として、感情労働であることが原因となってそれぞれの職務の質の向上が成り立つ、いわば職務上の成長が可能になっている（阿倍・大蔵・重本 ,2011）とする指摘もされている。

そして個別の報告からは、感情労働であることとバーンアウトのリスクの成立が比較的身近なものとされがちであること（三橋 ,2008）、感情労働をしたいのにできない状況がバーンアウトの現象化に背景として寄与していることが指摘されている（三橋 , 前掲）。しかし、バーンアウトに至った経緯の多様性・個別性を考慮すると、感情労働であるからバーンアウトしやすい、と関連付けるのは難し

い、とされている（三橋 , 前掲）。

また、重度身体障害者と介助者との介助関係についてインタビュー調査を行った菅（2006）は石川准の2004年の著作『見えないものと見えるもの―社交とアシストの障害学』に基づいて、感情労働の過程で至る関係性として感情公共性がある、と述べている。ここで述べる感情公共性とは、脱社交的関係とも言われ、意識されていない状態で、あるいは主体的に、公的かつ職務上求められる感情が表現されていることを意味している（菅 , 前掲）。また、菅は重度身体障害者と介助者との介助関係において重度身体障害者が感情規則を規定する力を持っている一方で、介助者は規定された感情規則に従うことが求められている点を指摘している（管 , 前掲）。そして、先ほど述べた感情公共性に至る経路として、介助を利用する立場である重度身体障害者と介助を行う立場である介助者との間で感情および介助方法などにおける対立、コンフリクトがある場合がある、とも指摘している（菅 , 前掲）。

そして、感情労働を対人援助職の職務を振り返る視点、労働観の一つとして用いることにより、自己および対象者の感情と出来事に関してストラテジーとして分析的な振り返りが可能になり、情緒的消耗の防止や成長に向けた論理的な取り組みが可能になりうることが報告されている（神谷 ,2012）。

4. 考察

まず文献検索の結果について述べる。障害をキーワードに入れない場合と比較して、障害をキーワードに入れた場合の文献件数は少ないものであった。とりわけ雑誌論文の件数は顕著に少なかった。これに加えて障害、およびストレスに起因する成長に関する文献の内容を振り返ると、バーンアウトについては職種別の調査が改めて行われており、レジリエンスについては定義のぶれがまだ見られる状況であった。そして、感情労働については論文数自体が非常に少ない状況であった。以上から、これら３つのキーワードに関連する研究はいずれについても対象を限定した事例研究と横断的、文献的研究との定期的な繰り返しにより、適切な定義とこれらのキーワードに関連する研究の社会的意義を確立しようとしている状況にあると思われる。

では、これら３つのキーワードに関する研究はどのような現象に注目しているのであろうか。この点について述べると、バーンアウト研究が現在の状況や過去に対するネガティブな認知に注目しているのと比べ、レジリエンス研究や感情労働研究は、対人援助職が外的刺激に適応する過程に注目している。また、レジリエンス研究は対人援助職自身が置かれた状況に対する認知に注目するのに対して、感情労働研究は対人援助職および対象者の感情という、より主観的な要素に注目している。

このように対人援助職の成長において対人援助職自身の主観的側面が重視される背景には、以下の三点があるものと推測される。第一に心理臨床家の成長には「自己」の参加と変容が治療的効果に欠かせない一部として報告されている点（金沢ら , 前掲）、第二に対人援助職の実践現場では被援助者の特徴を長所として活用する視点が重視されている点（藤田・青山・熊谷 ,1998. 阿部 ,2006. 奥村 ,2009.）、第三にポジティブ心理学の影響により対人援助職の成長についてもポジティブな視点での報告が増えている点（堀毛 ,2011. 新保 ,2000）である。以上から、対人援助職の成長には、ストレスを伴うネガティブな体験と実践の中で生じる対人援助職自身の変化を、ポジティブな体験として肯定的に認知するようになる過程が重要性を持つものと推察される。

では、多様な職種を含む概念である対人援助職について、障害児者にかかわる、という限定を付加

したならば、以上の考察はどのような意味を持ちうるであろうか。得津（2008, 前掲）は、障害に付随して生じる様々な出来事が、家族の成員同士の意見の相違、また家族の成員の個人的な葛藤を生じさせることがあり、家族の成員が個人で、および家族の成員同士の相互作用でその状況に適応していく過程の中に、家族レジリエンスを見出している。この得津の報告と、先に述べた対人援助職の成長に重要な過程とを比較すると、対人援助職が障害に付随して生じる葛藤に直面し、身近な他者とともに適応していく過程が成立することに、対人援助職の成長の一部が成立している可能性があるのではないか。ただし、感情労働に関する神谷（2012, 前掲）の報告から示唆されているように、対人援助職の職業上の客観性が担保されない状況には情緒的消耗のリスクが潜んでいる。したがって、この点において家族と対人援助職を同列に扱うことには注意が必要であろう。

換言すると、障害に付随して社会的にネガティブな意味を与えられた状況に対して、対人援助職自身が参与し、障害児者を含む身近な他者とともにその状況及びその状況に対する周囲および障害児者自身によるネガティブな認知を再構築し、ともに変化していく過程を肯定的に捉えていくことが、障害児者にかかわる対人援助職のストレスに起因する成長の今後の位置づけとして望ましいと思われる。そしてその意義としては、障害に付随して生じる社会的にネガティブな意味を与えられた状況を、対人援助を通じて社会的に肯定的な意味が与えられるものへと結び付けていくことがあると思われる。

5. 今後の課題

本研究では文献整理ののち考察を行った。これはあくまで理論的な考察であり、その結論も現時点ではあくまで仮説にすぎない。このため、現実の事例において本研究における仮説がどのように適用されうるかについて実証していく必要がある。例えば、障害児者にかかわる対人援助職として一定の専門性を発揮している方を対象とした、ライフヒストリー、クリティカル・インシデント等に注目した質的調査により探索的な検討を行うことのほか、それにより抽出された要素に基づいて、より広範囲の障害児者にかかわる対人援助職への調査などを行うことが必要であろう。そしてその結果を改めて既存の関連する研究の流れの中に位置づけなおすことにより、将来的には障害児者にかかわる対人援助職の成長に必要な介入、育成方法等を考える一助が得られるものと思われる。

参考文献

○対人援助職の成長に関するもの

・奥川幸子（2007）身体知と言語：対人援助技術を鍛える . 中央法規出版 .

・奥野洋子（2011）対人援助職におけるポジティブな変化について—看護師の自己成長感の特徴について . 近畿大学臨床心理センター紀要 , 第 4 巻 ,pp19-30.

・新保幸洋（2000）カウンセラーの熟達化及び成長・発達モデルの構築に関する研究動向 . 大正大学臨床心理学専攻紀要 , 第 3 巻 ,pp.8-23.

・金沢吉展・岩壁茂（2006）心理臨床家の専門家としての発達、および、職業的ストレスへの対処について：文献研究 . 明治学院大学心理学部付属研究所紀要 . 第 4 巻 .pp.57-73.

○ストレスに起因する成長に関するもの
・宅香菜子（2010）「外傷後成長に関する研究」-- ストレス体験をきっかけとした青年の変容 . 風間書房 .
○バーンアウトに関するもの
・清水隆則・田辺毅彦・西尾祐吾編著（2002）ソーシャルワーカーにおけるバーンアウト―その実態と対応策―. 中央法規出版株式会社 .
・田尾雅夫・久保真人（1996）バーンアウトの理論と実際―心理学的アプローチ . 誠信書房 .
・久保真人（2004）セレクション社会心理学―23　バーンアウトの心理学―燃え尽き症候群とは―. サイエンス社 .
・Beverly A. Potter（1986）Preventing Job Burnout, Crisp Publications. Inc. America. 高良麻子訳（2003）バーンアウト（燃え尽き）予防ワークブック　仕事のストレスを自分でコントロールする8　つの方法 . ブックマン社 .
・増田真也（1999）バーンアウト研究の現状と課題―Maslach Burnout Inventory の尺度としての問題点―. コミュニティ心理学研究 , 第３巻第１号 ,pp.21-32.
・増田真也・外島裕・藤野信行（2003）施設介護職者のパーソナリティ，バーンアウトと業務評価との関係 . 産業・組織心理学研究 , 第17巻第１号 ,pp.3-14.
・小堀彩子（2005）対人援助職のバーンアウトと情緒的負担感 . 東京大学大学院教育学研究科紀要 , 第45巻 ,pp133-142.
・小堀彩子（2008）看護師のバーンアウト促進・抑制要因としての共感性―調整変数を考慮に入れた検討 . 心理臨床学研究 , 第26巻第５号 ,pp.559-567.
・宮下敏恵・森慶輔・西村昭憲・北島正人（2011）小・中学校教師におけるバーンアウトの現状―３回の調査を通して―. 上越教育大学研究紀要 , 第30巻 ,pp.143-152.
・増田真也・外島裕・藤野信行（2003）施設介護者のパーソナリティ , バーンアウトと業務評価の関係 . 産業・組織心理学研究 , 第17巻第１号 ,pp.3-14.
・長谷部慶章・中村真理（2005）知的障害施設職員のバーンアウト傾向とその関連要因 . 特殊教育学研究、第43巻第４号 ,pp.267-278.
・長谷部慶章（2009）知的障害施設職員のバーンアウト関連要員の因果モデル . 特殊教育学研究 , 第47巻第３号 ,pp.147-154.
・高田純（2009）障害のある児童の担任教師のバーンアウト傾向 , 職場環境ストレッサー , 特別支援教育負担感 , 自己効力感 . 学校メンタルヘルス , 第12巻 ,pp.53-60.
・宮下敏恵（2010）保育士におけるバーンアウト傾向に及ぼす要因の検討 . 上越教育大学研究紀要 . 第29巻 .pp.177-186.
・上野徳美・山本義史（2011）心理学・心理学専門家は対人援助職にどのような支援が可能か . 大分大学高等教育開発センター紀要 , 第３号 .pp.47-60.

○レジリエンスに関するもの
・加藤敏・八木剛平（2009）『レジリアンス―現代精神医学の新しいパラダイム―』. 金原出版株式会

社 .
・SalvatoreR.Maddi,DeboraM.Khoshaba（2005）Resilience at work. AMACOM, New York. 山崎康司訳（2006）仕事ストレスで伸びる人の心理学―争わず、逃避せず、真正面から立ち向かう―. ダイヤモンド社 .
・平野真理（2010）レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み―二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成 . パーソナリティ研究 , 第19巻第２号 ,pp.94-106.
・石毛みどり（2010）中学生のレジリエンシー：３つの特性をもとにした類型化 . 白梅学園大学　短期大学　教育・福祉研究センター研究年報 , 第15巻 ,pp.12-24.
・紺野祐・丹藤進（2007）教師レジリエンスにおけるバーンアウトとポジティブ／ネガティブな経験との関係 . 日本教師教育学会年報 , 第16号 ,pp.77-87.
・得津愼子（2008）家族レジリエンスを促進するソーシャルワーカーと家族の会話プログラムの開発的研究 . 科学研究費補助金研究成果報告書 , 基盤研究（C）, 課題番号18530468
・砂賀道子・二渡玉江（2011）がん体験者のレジリエンスの概念分析 . 北関東医学 , 第61巻第２　号 ,pp135-143.
・橋本真規・橋本陽介・熊井正之（2011）障害児を育てる母親のレジリエンスの実態―半構造化面接調査による質的研究 . 教育情報学研究 , 第10巻 ,pp.1-13.
・北尾美香・常松惠子・高城美圭・河上智香・新田紀枝・上田惠子・石井京子・藤原千惠子（2010）看護職者のキャリア発達による患者及び患者家族レジリエンス支援の必要性の認知 . 日本看護学会論文集 , 看護総合 , 第41巻 ,pp52-55.

○感情労働に関するもの
・諏訪きぬ　監修、戸田有一・高橋真由美・上月智晴・中坪史典　著（2011）『保育における感情労働―保育者の専門性を考える視点として―』. 北大路書房 .
・三橋弘次（2008）感情労働で燃え尽きたのか？感情労働とバーンアウトの連関を経験的に検証する . 社会学評論 . 第58巻第４号 ,pp.576-592.
・須賀知美・庄司正実（2008）感情労働が職務満足感・バーンアウトに及ぼす影響についての研究動向 . 目白大学心理学研究 , 第４巻 ,pp.137-153.
・安部好法・大蔵雅夫・重本津多子（2011）感情労働についての研究動向 . 徳島文理大学研究紀要 , 第82巻 ,pp.101-106.
・菅由希子（2006）重度身体障害者の自立生活における介助関係―感情労働の視点から . 北星社会福祉研究 , 第21巻 ,pp.42-62.
・神谷哲司（2012）平成23年度児童関連サービス調査研究等事業「保護者支援における保育者の感情労働ストラテジーの解明」調査研究報告書 . 財団法人こども未来財団 .

○ポジティブ心理学に関するもの
・堀毛一也（2011）ポジティブ心理学の展開（ポジティブ心理学の展開―「強み」とは何か、それをどう伸ばせるか―）. 現代のエスプリ , 第512号 ,pp ５-27.

○障害児者への支援に関するもの
・藤田和弘・青山真二・熊谷恵子　編著（1998）長所活用型指導で子どもが変わる―認知処理様式を生かす国語・算数・作業学習の指導方略―特殊学級・養護学校用 . 図書文化社 .
・阿部利彦（2006）発達障害を持つ子の「いいところ」応援計画 . ぶどう社 .
・奥村賢一（2009）ストレングスの視点を基盤にしたケースマネジメントの有効性に関する一考察―軽度知的障害者の地域生活支援実践を通して―. 社会福祉学 , 第５巻 , 第１号 ,pp.134-147.